

## 戦場の死と性：田村泰次郎の戦争小説への傍注 (誌上シンポジウム 幸福について)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 健二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009216">https://doi.org/10.14945/00009216</a>

# 戦場の死と性

## —田村泰次郎の戦争小説への傍注—

Death and Sex on the Battlefield  
-Side Notes to War Stories by Taijiro TAMURA-

中尾健二  
Kenji NAKAO  
静岡大学名誉教授  
k\_nakano@pf7.so-net.ne.jp

I  
田村泰次郎の小説に「蝗」<sup>いなご</sup>がある。これは敗戦後（昭和21年2月に泰次郎は河北から復員）2年ほどの間に発表された著名な「肉体の悪魔」や「春婦伝」といった小説とならんで、中国大陆でのあしかけ7年にわたる泰次郎の従軍体験にもとづくものであるが、発表はかなり年月をへた昭和39年9月であった。それだけに生々しいリアリティをたたえた上記2作品などとくらべると、体験が濾過され、変形され、結晶化した印象をあたえる。表題となっている蝗（以下イナゴと表記）は、中国大陆でもときおり空が真っ暗になるほど異常発生し、穀物や草木を食いつくし、農民たちを塗炭の苦しみに陥れながら大陸を移動する、あの昆虫である。これがこの小説では、上官の命令のまま群れをなして中国大陆を移動する日本軍将兵たちともなり、主人公の肩にとまって動こうとしない一匹のイナゴが、負傷したためやむなく置き去りにしてきたひとりの朝鮮人慰安婦にもなる。イナゴは変幻自在にさまざまなもの代理表象となり、その羽音はときには大群となり、ときにはその数をへらして全編をつうじて響きつづけていく。このようにいわば象徴主義的な主題の扱い

において際だっているのが、この「蝗」という作品である。<sup>1</sup>

主人公の原田軍曹は、列車で能見山上等兵と平井一等兵をともない、その列車の三分の二以上の場所をしめる多数の白木の箱を原駐地から河南の平野のどこかにいる兵团司令部にとどけるべく中国大陆を南下する。それはいうまでもなく戦死者の遺骨をおさめる箱であり、いかに多数の戦死者を軍があらかじめ想定していたかをうかがわせる。さらに原田にはもうひとつの任務があった。5人の朝鮮人慰安婦とその雇い主の金正順をそこにとどけることであった。小説冒頭からあざやかに主題である「死と性」が提示される。この列車が黄河に近づいたとき、とつぜん列車は急停車する。車外から怒声がきこえる。

「こらーっ、出てこいったら、出てこんか。  
チョーセン・ピーめ」<sup>2</sup>

おりから黄河両岸には日本軍が敷設した仮橋を防衛するために高射砲部隊が配置されていた。車外から叫び声をあげたのは、その部隊の一将校であった。車輛の戸をあけ、車外に出た

原田は「遺骨箱が載っているだけであります」

と答えるものの「嘘をいうな。前から八輪目の車輦のなかには、五名のチヨーセン・ピーが乗っていることはわかっているんだ。新郷から無線連絡があったんだ。命令だ。女たちを降ろせといつたら、降ろせっ」といわれてしまう。この旅の途上で女たちがこんなふうにひきずり降ろされることはすでに二回もあった。軍刀をぬき大上段にふりかぶった、脅迫の身ぶりとその将校の「頼む。な、兵隊たちのために、頼む」という懇願調の声音の矛盾に、この若い少尉が兵たちに突き上げられてのことと感じた原田の抵抗心は萎えてしまう。

東の間の短い時間のそれは、彼らが頭のなかで、いつも想像しつづけている豊かな、重い、熱い性とは似ても似つかぬ、もの足りぬ、不毛のものではあったが、しかし、それは彼らがこの世で味わう最後の性かもしれないのだ。飢え、渴いた、角のない昆虫のように、彼らは砂地の上に二本の白い太腿をあけっぴろげにした女体の中心部へ蝟集した。

しばらくして女たちはふらふらともどつてきて、待っていた原田たちにたおれかかる。列車は女たちを乗せてふたたび走りはじめる。ところで原田たちは、そうしようと思えばそうできたであろうが、この旅の途上でその女たちを抱くことはなかった。原田はその女たちのひとりであるヒロ子をかつて10回以上も抱いたことがある、いわば馴染みであったにもかかわらず、である。それは、任務にたいする使命感か、女たちが白木の箱とおなじく公用物だからか。いや、ちがう。「この戦場では、彼女たちは自分の遊び相手ではなく、あらゆる瞬間、あらゆる場所で、死によって絶えず待ち受けられている共通の運命を持つ」「同族」なのであり、その彼女たちに自分の心のたたずまいを察知されることを恥ずかしいと思ったからである。

このとき、この場所で、彼女たちの肉体を求めるることは、彼女たちに自分の内部をのぞかされることである。ふたたび、生きて帰れるか、どうか、誰にもわからない、いまというとき、女体を力一ぱい抱き締め、生の確証をつかみたいという欲望と、人間としての弱々しさを、他人に見られまいとする、人間としての、そして同時に、兵隊としての虚栄心が、彼の心のなかで、血みどろな格闘をつづけていた。

女たちは疲れはてものとなってそこにのびていた。その姿態が兵隊たちの欲望をいっそうかきたてた。ここにこの小説で唯一「幸福」という言葉が出てくる行がある。

このような女たちの肉体にむしゃぶりつくことで、自分たちも人間であることやめたい衝動をおぼえた。彼らは、人間である必要はなかった。人間であることによってしばられる自分の心を、捨て去ることが、ここでは一番幸福に思えた。

「に思えた」とは、ほんとうはそうではなかつたということではないか。人間であることと幸福とが相互に排除しあってよいものだろうか。たとえ「に思えた」としても、それは死によって強迫されて「に思える」にすがりついているだけではないのだろうか。

## II

「おい、こんどの作戦は、ジンメツだよ」。ジンメツとは燼滅、すなわち作戦地域内の部落という部落を焼き払い、生あるものは犬の子一匹も生かしておかないことを建前とした作戦のことである。このセリフは、田村泰次郎が昭和29年に発表した「裸女のいる隊列」に出てくる。<sup>3</sup>敗戦直後に発表されたものと「蝗」の中間に

位置するといえようか。この小説は「私」を語り手とする私小説的なスタイルをとったごく短い作品である。燼滅作戦のいくつかの場面に遭遇した「私」は、いったい中国大陸全体ではどれほどになるのだろうかと作品のなかで自問する。そうした悲惨な場面を生きてきた「私」は、戦争が終わって何年たっても、日本人のひとりである自分も、人間全体も容易に信用できないと思っている。この不信の由来が、この作品では「私」が出会った、あるひとりの日本人将校に集約的に像をむすんでいる。

それは山脇大尉という将校だった。齢40歳ちかく、こんどの戦争に一年志願の将校として召集されるまではごく平凡な勤め人だったようだ。しかし、その訓練のきびしさには定評があり、補充兵は山脇隊に入れられなくてよかつたと囁きあった。そのかわり山脇隊は戦闘に強く、敵もすぐに退却するほどであった。新兵には度胸だめしに敵兵や日本軍に連絡しない部落の住民をとらえて、一名あたりひとりを刺殺させ、また女を強姦した場合には必ず殺すことが、この隊の暗黙の隊規（？）であったという。

「私」がこの山脇隊長の声をはじめて聞いたのは、大隊の戦死者慰靈祭にかれが弔辞を読んだときのことであった。意外にその声は小さく低く女の声のような声で、しかも早口であった。かといって戦死者の死を悲しむ誠実さのある声でもなく、機械かなにかがしゃべっているようであったという。もっと剛胆な声を予想していた「私」は失望する。さらに「私」が大隊本部情報室勤務となり、かれと身近に接するようになっても、かれは「私」をまともに見ようとはしなかった。この対人恐怖症的なしぐさを、「私」は大学出という「私」の経験に卑屈なものを感じたのではないかと推測している。山脇大尉は大声でどなることもない、なぜそんな山脇隊は統率がとれていて、かつ強いのか、あるとき「私」はそれをさまざまと見ることになる。

場所は山西省太行山脈、3千メートル級の山岳地帯で、冬は大地が1メートルの深さまで凍

る。凍傷にかかるときは肌のその部分が蟬細工のようにすきとおるのだそうだ。山脇隊への連絡に出された「私」は、稜線をすこし降りたところで、登ってくる山脇隊を待っていた。そのとき、隊列のなかに白い色がまじっているを見る。「私」には、それが何であるか見当がつかなかった。

けれども、近づくにつれて、まもなく、私にはわかつた。それは全裸の女なのだ。一個分隊くらいの間隔をおいて、その裸の女体は配置されている。あまりの唐突さに、私にはこの場面の意味が、すぐには判断出来なかった。

「貴様たち、この姑娘たちが抱きたかつたら、へたばるんじやないぞつ、——いいか、姑娘の裸をにらみながら、それつ、頑張るんだつ、——」

下士官がどなっている声が、聞こえてくる。隊列は、私のそばにきた。

眼の前をすぎて行く女の肌は、はつきりと鳥肌だっているのが見え、蟬人形のように透きとおつてきていて、むしろ、妖しい艶めかしさを帯びてさえ見えた。

女たちは通過した部落からつれてこられたのだろう。老婆が「娘をかえせ」とでもわめきながら小休止のため馬から降りていた隊長のそばに寄ってきた。将校のひとりが老婆をつきとばし、老婆は道路わきにたおれながら、まだわめいている。すると隊長は西瓜ほどの石をかかえ上げ、老婆にむかって投げつけたのである。

「ぎやつ」というような叫びが、山の空気をひき裂いて、老婆の頭は碎けた。ざくろのよう白っぽい脳漿が、凍土に、どろりと流れた。

誰も、なんともいわない。一瞬、ひんやりとしたようなものが、兵隊たちの胸から胸を流れたようだった。

## 「出発」

山脇隊長は、同じ調子の小声でつぶやいた。

まだ、びくびくと手足を動かせて、うなっている老婆を残して、ふたたび、隊列は、裸女たちをはさんで、肅々と動きだした。それは一糸みだれぬ、みごとな統率ぶりであつた。

「ひんやりとしたようなもの」は人間性の一片だったろうか。しかし、それは一瞬のことだった。山脇隊は戦闘マシーンとしては、つまりものとしては優秀だったのだろう。ここでものといったのは、もちろん物理的な物体ではない。ひとつの目的合理性がその集団を貫徹しているということである。ここでは戦闘に勝つこと以外はすべて手段と化す。こうした行為類型は、人間的な相互信頼の基盤を破壊してしまうがゆえに、ものなのである。分隊ごとの先頭に裸女を歩かせることもまた、それがどれほどの効果があったかわからないが、ある種の冷酷な合理性をもっている。行軍の隊列から兵士が落後することは、ほぼ確実に死を意味した。敵のかつこうの餌食になるからである。そのかわり裸女たちはもの化される、凍死しうが、強姦されて殺されようが、かまわないのである。ものは、すべてをものと化すのである。

虐滅作戦も、そういう意味では、ある種の合理性をもっている。敵が民衆の海を味方として戦っている場合、この海自体をないものにしてしまおうという考えも出てくるであろう。ベトナム戦争で、ベトコンが密林という風土を味方として戦っていたとすれば、米軍がこの密林をナパーム弾で焼き払い、枯れ葉剤で枯らして消滅させてしまおうとしたことと同じ考え方なのである。

## III

けっきょく原田はヒロ子を抱かなかった。ヒロ子が、自分の身体が自分であることを確かめ

るかのように身体を重ねてきたときも、原田は身体を硬くしていただけだった。「ハラタノバカヤロ！」。

列車は黄河北岸までしか通じていなかったので、そこからは徒步での旅となった。しかも制空権は敵にあったので、日中は休み、夜間の行軍であった。白木の箱は、原田が頭を下げまわってどうにかトラック部隊に運んでもらうことができたので、原田が気遣わねばならないのは女たちだけとなった。ある部落の家の中庭で、紺碧に澄みわたった空をながめながら原田が横になつて休んでいたとき、ヒロ子がやってきてかたわらに横になった。

「アア、コンナイイテンキハ、ユジョデテカラハジメテタヨ、ハラタ」

・・・

原田はいまはじめて、ヒロ子を人間として身近に感じるようになれた。原田の手をしっかりとぎっているその握力の強さに、彼に対するヒロ子の愛情の深さが感じられた。そこにいるのは、多勢の兵隊たちを、日毎夜毎、迎え入れては送りだす、つめたい機械のような女体ではなかった。・・・彼女に逢ったことが、原田には自分の生涯のなかで、なによりも意義のある、美しいことのように思えた。

「トコニ、センソー、アルカ」。しかし、幸福の一瞬にすぐさま現実がおいついた。周囲の部落の残敵が撃ったものか、一発の砲弾がその庭で炸裂し、ヒロ子は右脚の膝から下がほとんどちぎれるほどの重傷をおった。いそぎ原田は衛生下士官を呼びにやり、応急手当だけはしてもらったが、収容は断られる。担架を運ぶには、4人の人手がいる。危険をかえりみず部落中を探しまわるが、腰のまがった老婆しかいなかつた。自分たちで運ぶにも、装具や荷物があるから不可能だった。トラック部隊の隊長に頼みこむものの「廃品はどんどん捨てて行くんだ」と

いわれてしまう。闇のせまる庭に置いてくるしかなかった。

自分の左肩にとまって動かない一匹の蝗が、彼には不気味に思えた。・・・その一匹の昆虫の体重が、彼には急に大きな重さに思え、その重さに必死に堪えながら、彼は、自分の前や、自分の横を歩いている者の顔さえも識別出来ない、どこまでも限りなくひろがっている闇のなかを、一歩一歩、やわらかい黄土のなかへ、くるぶしまで埋めてはすすんだ。

黄塵が暗く空をおおうある日の午後、敵機の襲来がないと判断したためか出発命令が下る。しかし、麦畑を行軍中に黄塵をついてP40があらわれ、その機銃掃射によって金正順が胸部貫通銃創で、みどりが頭部をえぐられて即死、平井一等兵はマチ子を護ろうとしたかマチ子と折り重なって一発の銃弾でふたりとも腹部貫通銃創。まだ息はあったが、そこに置いてくるしかなかった。ようやく原田たちが白沙鎮にあつた兵团戦闘司令部につくと、副官は「一万の兵隊に、二名じゃ、どうするんだ」と怒鳴った。

原田は兵隊たちがつくる長い列にならんだ。そのときの陶酔感を思うと長い待ち時間もさして苦にならなかった。こうして原田が「死んだ動物のような、京子の動くことのない、のびきつた、白い肉体の上に乗りかかった」とき「彼は内股に、刺すような、鋭い触覚を感じ、身体をはなした」。それは、一匹のイナゴだった。

女の身体は・・・そこの部分が完全に麻痺してしまったように、そのことに気づかないのか、気づいていても、それを手で払う気力さえないので、節くれだつた六本の肢と、堅い羽を備えた昆虫のはいりまわるに任せて、完全に死んでしまっているなにものかのようにぐった

りと、そこにのびていた。

戦場には、死とものと化した肉体とそれら肉体の形づくる集団しかなかった。そこには、幸福が入りこむ余地はほとんど存在しない。陶酔感や快感はあるかもしれない。しかし、幸福は人間のみが感じができる何かだからである。

## 註

1 「蝗」については、ちくま文庫版を参照している。『肉体の門－田村泰次郎傑作選－』(1988年筑摩書房) 162頁以下。さほど長い作品ではないので、以下引用に逐一頁数をあげることはしない。

なお田村泰次郎の戦争小説が、正確に歴史的事実に立脚していることを調査した労作として尾西康充『田村泰次郎の戦争文学－中国山西省での従軍体験から』(2008年笠間書院)がある。

2 田村泰次郎は復員直後「日本の女には、七年間の貸しがある」と放言したそうである。町にいる日本人の娼婦たちは将校と御用商人の情婦になっていて、前線の兵士たちの相手となったのは、大陸の女たちだけだったという。娼婦や慰安婦にも階層構造が、いやもつとはつきりいえば差別があったのである。上記ちくま文庫の曾根博義による解説を参照、239頁以下。

田村泰次郎選集第2巻(2005年日本図書センター)の解題によれば、「春婦伝」の冒頭には、もともと以下の献辞があった。

「この一編を、戦争間大陸奥地に配置せられた日本軍下級兵士たちの慰安のため、日本女性が恐怖と軽侮とで近づこうとしなかつた、あらゆる最前線に挺身し、その青春と肉体とを亡ぼし去つた、数万の朝鮮娘子軍にささぐ」

この作品は、GHQ の検閲により予定されていた日本小説創刊号（昭和 22 年 4 月）には掲載されず、同年 5 月に単行本『春婦伝』（銀座出版社）に収録された。その際、この献辞が削除され、主人公春美が朝鮮人であることを明示する語句も曖昧なものへと改変されて今に伝わっている。GHQ の削除理由は、「朝鮮人批判（Criticism of Koreans）」であるが、本気で GHQ の担当者がそう思っていたとしたら、皮相というか誤読というしかない。しかし、その後も日本人の記憶から「朝鮮娘子軍」にまつわる事実が抹消されたとすれば、こちらの見えない検閲こそ問題とすべきだろう。

3 「裸女のいる隊列」については、田村泰次郎選集第 4 卷（2005 年日本図書センター）を参照している。18 頁以下。「蝗」同様引用に逐一頁数をあげることはしない。